

## 外国語児の格助詞学習のための絵本・アプリの開発—自ら考え気づくプロセスを重視して—

趙 翌（慶應義塾大学 日本学術振興会特別研究員 PD）

## 1. 研究の背景と目的

グローバル化が進むにしたがい、出生地と異なる国・地域に在住する子どもが増えている。日本に在住する日本語を母語としない子ども（以降、外国語児）も増加の一途を辿っており、現在2万8千人もの外国語児が日本語の支援を必要としている（文部科学省 2016 年公表データ）。特に、言語能力の中軸ともなる文を理解する能力は日常生活で不可欠な言語能力であり、学校での教科学習に必要な言語能力の基礎を支える上でも非常に重要なものである。例えば、「山のでっぺんに登って、てっぺんにある広場を散歩した」というような、教科書を始めとする教材で使用されている文を正確に理解する際、格助詞を正しく理解する能力が必要である。本研究の目的は、外国語児の場所を表す格助詞「山をのぼった」「山のでっぺんにのぼった」（以下、格助詞）の学習における気づきと明示的な教示の有効性について検討し、気づきをうながす教材（絵本・タブレット型学習アプリ）を開発することである。

## 2. 研究の内容

## 【格助詞学習における気づきの検討】

言語学習の気づきをうながす際、対象の言語項目を際立たせ、言語の規則を明示的に示すことが重要である（e.g., Schmidt, 1990）。英語母語 5 歳児の第二言語（以下、L2）としての人工語の学習において、対象の言語項目の明示的な規則の教示によって、その学習が促進された（Lichtman, 2016）。本研究では、3 歳から 10 歳の間に学校等で日本語に本格的に触れ始めた外国語児（6 歳～9 歳の計 16 名の児童）を対象に、(1) 外国語児がどれほど格助詞を理解できているのか、(2) 格助詞と使用される動詞の違いや位置を表す語に焦点を当てて学習させることで、格助詞の学習に有効に働くのかについて調べた。

結果として、(1) 対象の外国語児が格助詞を十分に学習できていないことが示唆された。また、(2) 子どもが格助詞ヲとニの違いに気づき、両者の学習に有効にはたらくことも明らかになった。

## 【学習メカニズムを踏まえた教材の開発】

外国語児の格助詞ヲとニの学習において、格助詞と使用される動詞の違いや位置を表す語に焦点を当てて学習させることで、格助詞の学習に有効にはたらくという研究結果を踏まえ、教材を開発した。具体的には、子どもに身近な場面（公園・校庭・道路など）で、場所を示すヲとニが使用されている文とそれに会う動作をしているキャラクターが呈示され、子どもはそのキャラクターをタップして動かすことで、その動作を示す文が音声で流れるアプリケーション・絵本を開発した（絵本では、文は視覚呈示）【右図】。アプリは、動作の確認（自分で動かして文を聴く）とクイズから成り立っており、文は日本語の他に中国語・英語・モンゴル語・ポルトガル語・インドネシア語・ベトナム語の計 7 言語で聴くことが可能である。これは、日本語がまだよくわからない子どもが内容を理解できること、そして、日本に長く生活していることで母語を忘れてしまわないよう、日本語のストーリーを母語でも話せるように練習をしたり、母語の学習の動機付けとして活用されることを目的とした工夫である。



## 【教材『「を」べんきょうしよう「に」』の使用】

外国語児 5 名（小学校 1 年生～3 年生の外国語児）に『「を」べんきょうしよう「に」』（アプリ・絵本）を使用してもらった。使用前は、37 問の格助詞テストにおいて 25% 程度の正答率であったのに対し、使用後は約 80% にもものぼった。何より、積極的に教材を使って、教材のキャラクターを動かしたり、文を聴いたり読んだりクイズを行い、養育者や学習支援者と教材を使ってインタラクションをし、学習意欲の向上へと結びついていた。さらに、外国語児が多言語対応の機能を使い、自分の母語では言い表せない動詞や名詞を母語で表し、母語ももっと勉強しなければいけないという意識を持ち始め、日本語、そして母語、さらには外国語（英語）の学習の動機づけになったと考える。

## 3. まとめと今後の課題

本研究では、日本語の場所を表す格助詞の機能について考え気づくメカニズムを踏まえた教材を開発した。外国語児はその教材を積極的に使用し、格助詞を学習していた。今後は、教材の普及や実用化を目指すことに加え、養育者や学習支援者とのやりとりについて詳しく検討し、他者とのインタラクションを重視した学習にも着眼し、研究をしていきたい。